



# GRL NEWS

Gender Research Library  
Nagoya University

名古屋大学  
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

## No.10

2023年1月発行

## 「令和4年度女性のチャレンジ支援賞受賞」を機に決意を新たに

(名古屋大学副総長(多様性・男女共同参画担当)、  
大学院生命農学研究科教授)  
東村博子

この度、内閣府男女共同参画局より「令和4年度女性のチャレンジ支援賞」を授与いただき、大変光栄に存じます。過去20年以上にわたり、研究者として実績を重ねつつ、女性研究者支援のために精力的に活動してきたことを高く評価して頂いたことに感謝しています。これまで「ほ乳類の生殖機能を制御する脳内メカニズム」に関する学術成果により、3つの学会から学術賞を授与され、さらに2023年度もひとつの学会から学会賞を授与されることになりました。私たちの研究により、効率的な家畜生産に資する新たな技術開発や生殖医療への貢献を目指しています。加えて、私は本学において、2002年の男女共同参画室員への就任以来、同室長、同担当総長補佐、男女共同参画センター長を経て、2021年度より名古屋大学副総長(多様性・男女共同参画担当)を務めています。また、男女共同参画推進セミナーなど、全国で150回を超える講演等を実施し、学内外での男女共同参画の推進にも少なからず貢献できたと自負しています。

日本では未だ女性の活躍が限定的であり、他の国々と比べて大きなジェンダーギャップがあります。未来志向で考えれば、性別によらず全ての人々が適材適所で活躍することが、学術分野や社会における「伸びしろ」となります。名古屋大学は、2022年に東海国立大学機構として岐阜大学と共に「ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョン&ピロニング推進宣言(DEIB宣言)」を発出しました。DEIBを実践する社会を構築すれば、ワーク・ライフ・バランスの向上と女性の社会での活躍が進み、家庭のインカムも増え、少子高齢化に歯止めをかけことができると確信しています。このムーブメントを加速的に進め、ジェンダード・イノベーション(ジェンダー視点を入れた科学技術革新)を推進し、さらなる学術の進歩や新たな価値創造と社会システムの改善に貢献したいと考えています。

私にとって、家畜の生産性向上による食料の安定供給に向けた農学研究と、男女共同参画推進の取り組みは、より良い社会への貢献という意味で両輪をなすものです。本受賞を機に、今後も人々のウェルビーイングに貢献したいという決意を新たにしました。

## 男女共同参画社会づくり 功労者内閣総理大臣表彰を受けて

(三重大学名誉教授、  
公益財団法人東海ジェンダー研究所)  
小川眞里子

これまでに多くの学びの機会を得たことに感謝し皆様にお礼を申し上げます。私は19世紀イギリスの科学史を専門としていますが、1989年にロンダ・シービンガーの著作*Mind Has No Sex?*(拙訳『科学史から消された女性たち』工作舎)に出会い、女性不在のごとく描かれてきた科学史が実は女性排斥の歴史であったことに衝撃を受け、科学とジェンダーという分野にも関心を抱くようになりました。

男女共同参画に関係する三重県の委員を幾つかさせていただきましたが、中でも男女共同参画推進協議会は国の行動計画に先進的に取り組み、1999年の「男女共同参画社会基本法」の施行を受けて県の積極的な対応を求め、全国4番目の早さで「三重県男女共同参画推進条例」の制定を実現させました。この協議会で素晴らしい先輩委員に出会うことができたのはありがたいことでした。

2001年に分担者として提言の取りまとめに関わった文科省の調査研究「科学技術分野における女性研究者の能力発揮」は、わが国の女性研究者政策の先駆けをなすもので、英・独への調査派遣も新鮮な経験でした。拙著『フェミニズムと科学/技術』(岩波書店)が想像以上の評価を受け、2005年11月にOECDとフランス政府との共同開催による国際ワークショップ“Women in Scientific Careers”に、政府から日本代表としてパリに派遣され、国際的な場で女性科学者の増加がいかに喫緊の課題となっているかを知ることになりました。

2005年にはトヨタ財団からの助成金、翌年に科研費も得てアジア7か国20名程からなる「女性と科学/技術」のネットワークを構築し、韓国・台湾とはさらに緊密な共同研究を進め、米国科学財団(NSF)の仕事にも関わりました。2006年スタートの文科省「女性研究者支援モデル育成事業」に三重大学も応募し2008年からの3年間、男女共同参画担当学長補佐として事業推進に当たり、最高のS評価を得ました。

大学退職後、三重県男女共同参画審議会会長を務めるなか、東海ジェンダー研究所にお誘いいただき、ここでGRLとのご縁を得ました。学問的にはシービンガーとの出会い、国内的には三重県で男女共同参画推進に尽力された先輩方のお導き、国際的にはOECDをはじめ、NSFやEC研究総局との繋がりに感謝しつつ、今後も東海ジェンダー研究所での活動を通して若いジェンダー研究者の力になりたいと思っています。

## GRL連続セミナー「家族とジェンダー」 第6回開催報告

(名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンター特任助教)  
川口遼

2022年10月14日にGRL連続セミナー「家族とジェンダー」第6回が開催されました。今回は、清水美紀先生(明治学院大学心理学部助教)を講師にお招きし、ご著書『子育てをめぐる公私再編のポリティクス:幼稚園における預かり保育に着目して』(勤草書房、2019年)についてお話いただきました。

ご講演の内容は預かり保育の政策言説と、幼児を預かる幼稚園教諭および幼児を預ける保護者の語りから、「誰がどのように子育てを担うべきか」というせめ



ぎ合いを描き出す、大変刺激的なものでした。例えば、政策レベルでは、2000年代半ば以降、預かり保育が拡大していく中で、「家庭教育力の補完」といったようにむしろ子育ての本来の責任が家庭にあることが強調されるようになっていったとのことです。他方、幼稚園教諭や保護者の語りからは、子育て負担の軽減として肯定的に意味付けられる一方で「子どもの本来の居場所は家庭である」との考えのもと、利用についての葛藤が示されることもあったことが紹介されました。

ジェンダーの観点から興味深いのは、保育者も利用者も女性が想定されており、実際、調査協力者が女性に限られていたことです。つまり、子育て支援が進展し

てもそのことがジェンダー秩序の流動化につながるのかどうか、定かではないわけですが、それでも、母親たちが葛藤しつつも現実的に頼ることのできる受け皿が存在することは意義深く、その利用・拡大によって幼稚園という場に規定された家族・ジェンダー像が緩やかに解かされていくことが期待されます。清水先生はこれを「同質性の中にある異質性との出会いの契機」と印象的に表現されていました。

今回初めての試みとして、オンライン・対面のハイブリッド方式で開催したところ、60名の方にご参加いただきました。活発な議論が行われ、今後もGRLがジェンダー研究の交流の場となることが期待されました。

## YYトーク第1回「マイノリティの体験を 質的研究によって描く」開催報告

(名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンター特任助教)  
町田奈緒士

今年度より、Yours & Youth Cross Talk (通称YYトーク)という、若手研究者らが、先輩や後輩、近隣の研究分野の人々と国内外問わずクロスする形で会話・交流できる場の創出を主な目的とした新企画を始動しました。第1回目となる今回は、京都大学大学院 文学研究科 准教授の丸山里美先生をゲストとしてお招きし、互いの著書である『女性ホームレスとして生きる一貧困と排除の社会学』と『トランスジェンダーを生きる一語り合いから描く体験の「質感」』について紹介し合うとともに、それに基づいた対談を行いました。

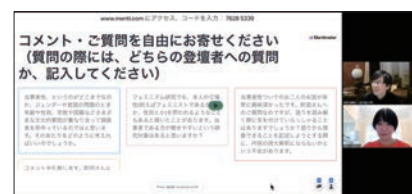
著書の他己紹介を通じ、社会学と心理学ということで専門とする学術領域は異なるものの、人の「生」に肉薄したいという問題関心を共有していることが分かり

ました。続く対談パートでは、質的調査の同質性・異質性を中心に議論しました。社会学・文化人類学等では、構築主義的な認識論がすでに共有されており、調査者が分析に登場することがすでに市民権を得ています。そのため、方法論の弁明(エクスキューズ)が必須でないのに対し、心理学ではそうした調査者の主観の描写は未だ主流ではないために、そうしたエクスキューズが必要であることなどが話題に上りました。

参加者からは、主に「当事者性」をめぐる質問が寄せられました。そこから、必ずしも女性当事者、トランスジェンダー当事者だから、当該集団にインタビューをしやすいということではなく、相手との関係性や、相手の目に映る「私

に、私が自覚的になりながら、語りを見ることが重要なのではないかと、といった点が浮かび上がりました。

事前申込者は93名、当日参加者は53名と、事前申込よりも少ない人数となりましたが、その分、参加者の一つひとつの問いに丁寧に応答ができたように思います。次回以降も、参加者からも活発な意見が飛び交い、この場で新たな学知が芽生えるような企画にできれば嬉しいです。



## ジェンダー研究集会開催助成事業「ジェンダー化された帝国日本の周縁 ——インターセクショナルリティの視座から」

(名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ研究員)  
目黒茜

12月7日に、オンライン学術講演会として「ジェンダー化された帝国日本の周縁——インターセクショナルリティの視座から」が開催された。戦前期日本における〈帝国とジェンダー〉をめぐるテーマに対して、インターセクショナルリティという新たな視座から、帝国の周縁に置かれた人々—獄中の人々、娼婦、炭鉱労働者、ハンセン病患者・回復者、地域の女性た

ちの歴史的経験について再検証する試みが報告された。帝国資本主義において、当時のマイノリティとされてきた人びとが、複数の支配構造のなかで労働力として動員されていたことに着目し、帝国拡大をめぐる人びとの労働と生活がいかに編成されたのかという重要な論点が提示された。報告に対して、インターセクショナルリティを研究視座として用いること

の意義や、戦時期の総力戦体制がもたらした合理化の戦後日本における影響などの論点がコメントから出され、活発な議論が展開された。



## 2022年度GRL企画展示「女医」の近代：戦前期日本における女子医学専門学校の経験

(名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ研究員)

目黒茜

2022年10月よりGRL研究員に着任した目黒茜です。どうぞよろしくお願いたします。私はこれまで、近代日本において「女医」と呼ばれてきた人びとの歴史社会学的な研究を行ってきました。女医関係の史料調査を行ってきたこれまでの経験をいかし、2022年度GRL企画展示「『女医』の近代：戦前期日本における女子医学専門学校の経験」を担当しております。

実は以前より名古屋大学附属図書館医学分館にのみ所蔵されている女医関係の史料の存在を知っており、ぜひ実際に手にとって見てみたいと思っていました。附属図書館医学分館に足を運んでみたところ、戦前に誕生、発展し、戦後に衰退することになった私立・公立の女子医学専門学校関係史料の豊富さを目の当たりにし、これら

を企画展示としてぜひ紹介したいと強く思いました。また、GRL水田珠枝文庫の資料からも、戦前期の職業婦人としての女医について言及する文献にも出会いました。

企画展示ではとくに、戦前期における女子医学専門学校の発展に着目し、時代に翻弄されながらも生き生きと駆け抜けた女医たちの歴史を紹介しております。女子医専の発展期でもあった1930～40年代前半には、それまで私立の女子医専のみだったところ、公立の女子医専も設立されることになっただけでなく、植民地においても拡大していくこととなりました。こうした戦前期における女医の歴史について解説するギャラリートークも開催しておりますので、ぜひお気軽に足を運んでいただけたらと思います。



## メアリー・ホークスワース著『ジェンダーと政治理論——インターセクショナルなフェミニズムの地平』(2022年、明石書店)を刊行して

(名古屋大学大学院法学研究科博士後期課程)

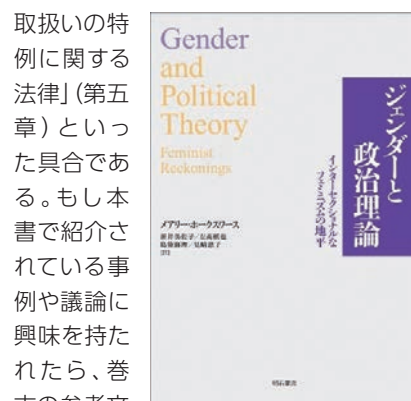
左高慎也

この度、メアリー・ホークスワース著『ジェンダーと政治理論——インターセクショナルなフェミニズムの地平』を明石書店より刊行した。本書が目指すのは、第一章でも述べられている通り、「批判的人種理論、フェミニズム理論、ポストコロニアル理論、クィア理論、トランス\*理論における洞察を活用することによって、正義に関する一般的理論の射程に疑義を唱え、有害な国家の行為と不作為を可視化し、訴えることを可能にするような方法で、不正義の概念化を拡張する」(本書22-23頁)ことである。政治学の「正典」をフェミニズム理論の観点から批判的に読み解く著作としては、キャロル・ペイトマンの『秩序を乱す女たち?』と『社会契約と性契約』、あるいはスーザン・モラー・オーキンの『政治思想のなかの女』と『正義・ジェンダー・家族』といった書籍が日本語に翻訳されている。本書は、これらの諸著作と問題関心を共有している。

本書の最大の特徴は、そこからさらにインターセクショナルリティ(交差性)の視点を推し進めて、そうした「正典」の批判的読み直しを、フェミニズム理論のみならず、批判的人種理論、ポストコロニアル理論、クィア理論、トランス\*理論をも横断しながら行っている点にある。著者によ

れば、『女性』について無条件に主張することは、時間、空間、文化、階級、人種、セクシュアリティ、国籍から独立して、女性の間には有機的な関係性が存在しているという誤った考えを伝達して、重大な権力のダイナミクスを覆い隠しているかもしれない(本書30頁)。だからこそ、インターセクショナルリティを基軸に据えた視点が必要となるのだ。このように本書で展開されている議論は、『ジェンダーと政治理論』という主題から一般に想像される内容よりもはるかに射程の広いものである。日本語版の刊行にあたって、副題を『インターセクショナルなフェミニズムの地平』とした所以である。

本書のもう一つの特徴は、「理論」と「現実」を往還した議論が展開されていることである。本書で扱われているテーマは、ジェンダーの概念化(第二章)、身体化=身体性(第三章)、公/私二元論(第四章)、国家と国民(第五章)、正義(第六章)と多岐に渡っているが、いずれの章においても膨大な数の先行研究を引きつつ多種多様な事例について論じている。一例を挙げれば、数多くの難問を突き付けることになったカナダにおける裁判の判決(第一章)、近代における植民地化(第三章)、日本の「性同一性障害者の性別の



取扱いの特例に関する法律」(第五章)といった具合である。もし本書で紹介されている事例や議論に興味を持たれたら、巻末の参考文献リストに記載されている諸文献を参照することをお勧めしたい。こうした特徴を有する本書は、政治学・政治理論に関心を持っている人にも、ジェンダーに関心を持っている人にも(そしてもちろん両方に関心を持っている人にも)興味深く読んでいただけるだろう。本書が多くの人に読まれることを記者の一人として願っている。

1 新井美佐子・左高慎也・島袋海理・見崎恵子訳。原著はMary Hawkesworth (2019) *Gender and Political Theory: Feminist Reckonings, Polity*である。なお、原著も日本語版もGRLに所蔵されている。

# 図書館総合展2022 エルゼビアフォーラムを終えて

(名古屋大学附属図書館東山地区図書課  
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ司書)  
坂川万理子

図書館関連として国内最大のイベントである図書館総合展の存在は、図書館員ならば誰もが知るところであり、私も毎年楽しく参加(2020年の第22回以降はオンライン開催)させていただいておりました。その図書館総合展で、縁あってGRLを紹介してくださいというお話をいただき、図書館総合展2022エルゼビアフォーラム「研究のジェンダー格差解消に向けて:大学図書館、出版社の取り組み」の中で、「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ 大学図書館としてのジェンダー平等への取り組み」と題して、ライブラリ設立や運営や取り組みについて講演させていただきました。

ジェンダー・リサーチ・ライブラリがジェンダー研究に特化した図書館であり、さらにジェンダー研究の様々な活動拠点でもあることを知っていただくために、当ライブラリの蒐集図書やコレクション、アーカイブ、水田珠枝文庫の説明やセミナー・シンポジウム、企画展示、『GRL Studies』や『GRL NEWS』等について写真を活用しながら紹介を行いました。

その中でも大学院生サポートスタッフ制作のジェンダー関連のポスターや図書POPがジェンダー平等に対して学生たちが関心を持つきっかけ作りになっている点に興味を持たれた参加者が多く、ジェンダー研究に若い研究者や学生たちが積極的に関わることの意義・重要性を再認識いたしました。

また、林葉子教授が担当された水田珠枝文庫の講演の部分では、海外の女性図書館や独特のコレクションを持つ図書館の事例とともに水田珠枝文庫について説明されました。水田珠枝文庫が日本におけるフェミニズム史の軌跡をたどる貴重なコレクションであり、GRLがそういった文庫を持つ魅力ある図書館であることを知っていただけたのではないのでしょうか。

ジェンダー・リサーチ・ライブラリ5周年という節目の年に、改めて全国の研究者や図書館員、学生そしてジェンダーに関心のある方々にライブラリを紹介することができたのは、このオンラインフォーラムにお声がけくださったエルゼビア社の関係者や発表の場を与えてくださったGRL関係者、そして林教授のおかげと感謝しております。

そしてこのオンラインフォーラムをきっかけにライブラリを訪れてくださる方が増えることを期待しております。講演をさせていただいた頃は晩秋でライブラリの外はイチョウやもみじ等の紅葉がきれいだったのですが、現在はキャンパス内もすっかり冬景色となりました。名古屋大学東山キャンパスの美しい冬景色をガラス越しに眺めながら、ジェンダーの本を手に取り、ジェンダー研究に思いを馳せる…そんな時間を過ごしませんか。

皆様のご来館をお待ちしております。



名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ  
—大学図書館としてのジェンダー平等への取り組み—

〒464-8601  
名古屋市千種区不老町  
地下鉄名城線  
名古屋大学駅下車  
1番出口すぐ

坂川万理子(東海国立大学機構名古屋大学附属図書館  
東山地区図書課 ジェンダー・リサーチ・ライブラリ担当司書)

<http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>

## ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々に利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール([grl@adm.nagoya-u.ac.jp](mailto:grl@adm.nagoya-u.ac.jp))までお知らせ下さい。



お問い合わせ: [grl@adm.nagoya-u.ac.jp](mailto:grl@adm.nagoya-u.ac.jp)

電話: 052-789-5111 (代表)

アクセス: 〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分